木森山水道
表紙／asagiri
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
女体育教師の
壹辱
学生若牡との背徳密事
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『女体育教師の喜辱　学生若牡との背徳蜜事　前編』『同　後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

女体育教師の喜辱

学生若壮との背徳蜜事

木森山水道
表紙／ asagiri

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みしまみうこ
三島美羽子

凛とした立ち振る舞いから、男女生徒ともに人気の高い女体育教師。私立学園で生徒たちを指導している。

やまがみふみお
山上富実男

美羽子とともに体育を教えている中年男性教師。美羽子に張り合おうとする。

みなせたく
水瀬卓

山上担当の体育の授業を受けている生徒。

やまがみこうた
山上幸多

山上富実男の息子で、学園に在籍中の学生。

三島美羽子（みしまみうこ）は二十四歳。某私立学園で体育教師を務めている。

低くて硬い凛声による号令は、上から目線を嫌う思春期男女にも好評だった。うなじにかかる程度の短い黒髪は手入れの甲斐ありさらさらで、女子学生の羨望を集めている。凛と引き締まった柳眉と切れ長の目が質実剛健な性格を体現していた。

百七十五センチの長身は大抵、教師用の野暮ったい濃紺ジャージで包まれていた。ジャージから伸びる顔と手足は小麦色に日焼けしているのだが、それ以上の素肌を見た者は滅多にいない。彼女はどんなに激しい運動をしても、そして猛暑の夏でもせいぜい腕まくりしかしなかった。水泳の授業もジャージで口頭指導するほど。

しかし、身体のラインを見せにくくする服を着ていても、女の凸凹は隠せていない。スポーツ好きで活動的な女性という特徴も相まって、きっと脱いだら凄いに違いない、脱いだらホントに凄かったとの噂もあった。

「アタシに勝てるわけないだろ？」

じりじりと太陽が照りつける初夏の日のこと。湿気が少なく、思い出したように吹く風が心地よく肌を撫でてくれる、絶好のスポーツ日和だった。

その日の体育の授業は男女に分かれてのソフトボール対抗戦で、つい今しがたまで息詰まる熱戦が繰り広げられていた。女子を率いたのは監督兼選手の三島美羽子であり、男子

を率いたのは山上（やまがみ）という中年体育教師。彼もやはり監督と選手の両方を務めた。
試合の提案者である山上教師は、体育会系がいかにも考えそうな、負けたらバツゲームという罰則を提案した。負けた方は勝った方の言うことを聞くと言うのがその内容。実際に命令できるのは、チームの最高責任者である体育教師となる。下心を見透かした美羽子は遠まわしに不要と意見したのだが、彼は聞かなかった。そしてその彼が敗れた。
「それじゃ、せっかくだからバツゲームを受けてもらうか。田中（たなか）と木杉沢（きすぎさわ）、前へ」
特別大声でもないが、グラウンドの隅まで届いていそうなキビキビとした美声が名指しする。中肉中背のハンサムと大柄でいかつい男子が渋い顔で進み出た。どちらも仲良く坊主頭をしていて、学園のマークが施されたTシャツと学園指定の緑色の短パンを穿いている。
二人とも男子ソフトボール部のレギュラーでバッテリーを組んでいる。この試合でも持ち前の力を容赦なく発揮し、守備だけでなく攻撃面でも女子を大いに苦しめた。もしも男子のMVPを決めるのならばこの二人のどちらかだろう。
だが、女子チームから見れば不倶戴天の敵以外の何者でもなく、その意味ではバツゲームという報復の標的になるのは不自然でなかった。
「二人はついてこい。授業終了時間に少し早いが他の者は解散だ。男子もな。担当の山上先生は頑張りすぎて保健室で寝てるから、アタシの指示に従ってもらう」

授業の早終わりに異論が出るはずはなく、そこで授業は終了。呼び出された二人は、一足先に自由を得たクラスメイトに同情の目で見送られた。

三人が向かった先は体育用具室だった。用具室と言っても、ホームセンターで十万円前後で売られていそうな物置小屋。学園の敷地の外れに位置し、校舎ともずいぶん離れている。もしも中で大声を出しても、校舎内の学生が聞きつける可能性は低いだろう。周囲には林しかないので人が通るのも稀だった。

「入ってくれ」

美羽子がしんがりになり、男子二人が用具室の中に入る。歩くとガンガンと響く薄型金属で構成されている室内は、夏ということもあり蒸し暑かった。じっと立っているだけで自然と汗が噴き出てくる。埃っぽい匂いが充満しているにもかかわらず、換気用の窓などもない。四方は外見と同じくクリーム色の硬い壁で囲まれている。

内部には、跳び箱や平均台、ハードルなどの競技用具の他にもメジャーやラインカー、ビブスといった補助道具もある。ただどれにしろ、運動部は必要な物を独自に所有しているので体育以外で使用されることはない。つまり、これらの道具を求めてやってくる学生はいないと言ってもよかった。体育が終わったばかりの今は尚更に。

ガチャリ。

施錠音を聞き、ぎょっとして振り返る男子達。美羽子は内側から鍵をかけ終え、内部照

明のスイッチを入れた所だった。光の差さない室内に、蛍光灯の青白い光が満ちる。
「先生、なんで鍵をかけるんです？　というか内側から施錠できましたっけ、ここ」
と試合では捕手を務めていた大柄な田中。露骨にうろたえてはいないが、わけが分からないという顔をしている。
「アタシが内側から鍵をかけられるようにしたんだよ。ここの管理者はアタシで、自腹切ったから学園もうるさく言わなかったな」
困惑しているのは力投した中肉中背の木杉沢も同じだった。そんな男子達を順繰りに見やる美羽子。切れ長の目が愉快そうに歪んでいる。
「鍵をかけたのは、他人に邪魔されたくなかったからだ。実は二人に相談があるんだ。前々から考えていたんだけれど、いい機会だから今日にした」
音程の低い声が、声量も低くなっている。まさか学生が教師から相談されるとは。驚いて目を丸くする二人だったが、相談の内容を聞いた途端、顔を真っ赤にして激昂した。
「俺らに八百長の片棒を担げってんですか、冗談じゃない！」
女房役の田中の怒りに木杉沢も大きく頷き、自分の思いも口にする。
「オレ、美羽子先生のこと見損なってました。運動能力抜群で、正々堂々とした性格の素晴らしい女性だって尊敬してたのに」
対する美羽子は教え子達の怒声を静かに受け止めている。表情に変わりはない。彼らが

言いたいことを全て聞き、
「アタシはアタシを負かして山上が有頂天になってる所なんか見たくない。お前らは？」
烈火のごとく怒っていた二人が、それだけで目をパチクリさせた。
「う……そりゃぁ、まぁ、俺らもそうですけど……だからって八百長は」
怒りの炎の勢いが弱まった所に凛声が響く。困り顔の二人を真っ直ぐに見つめ、木杉沢が絶賛した女体育教師の顔で、
「スポーツマンシップを大事にするお前らの気持ちは立派だ。教師として誇りに思う。けど、ちょっとくらいは融通を利かせたっていいだろ。公式戦で手を抜いてくれって言ってるわけじゃなく、今日みたいな対抗戦で手心を加えて欲しいと言ってるんだ」
坊主頭の男子達はどうしたものかと顔を見合わせている。二人が品行方正で真面目な学生であることを美羽子は知っている。スポーツマンシップを尊重し、心の支えにして部活動に励んでいることも。
「もちろん、ただでとは言わないぞ」
凛声に粘り気が混じっていた。雰囲気の変化を感じ取り、何事かと美羽子を見る二人。その目の前で、彼女はジャージの上着のジッパーに指を添える。息を呑む男子達。
「言うことを聞かなければ成績を落とすなんて卑怯なことは言わない。どこかの中年体育教師みたいなことはな」

ゆったりと、抑揚をつけて言葉を紡ぐ美羽子。四個の視線が自分の指先に集中しているのを心地よく思いながら、秒針の速度でチャックを開放していく。ジジジという鈍い音が狭い室内に木霊する。

ゴクリ……。

生唾を飲み込んだのはどちらだったか。もしかしたら両者かも知れない。田中も木杉沢も美羽子の肉体美に関する噂は聞いている。『脱いだら凄いに違いない』という点は、その通りだと予想していた。もっと言えば、彼らは性欲旺盛な思春期男子。それだけに、不脱のジャージが開かれていく瞬間は見逃せない。瞬きを忘れて食いついている。

下から少しずつ開いていくジャージの裾。結合を解かれた布は左右に分かれてだらんと垂れる。その間から小麦色の肌が覗いている。熱い視線を浴びながらその面積が徐々に大きくなっていき、ジャージはとうとう襟の部分から左右に分かれた。

「これがアタシの気持ちだよ」

美羽子は上着の裾を握ると、左右にガバリと広げてみせた。

「おおっ！」

どちらからともつかない歓声。露になったバストは、発育のいい同級生女子でも全然敵わない代物だった。グラビアアイドルや女優でも、これほどの女性はあまり見ない。

「サイズは九十四センチのEカップだ」

勿体つけるように、見せつけるように言い放った。小麦色の巨乳は、真紅のマイクロビキニブラで吊るされている。頂点付近を申し訳程度に覆う三角形の布は、肉がみっちり詰まった乳房を支えきれずに食い込んでいた。端から伸びている細く赤い紐も房の外側に半ば埋まっている。

女体育教師のものは、大きさだけでなく形もいい。若さと生命力に溢れていて、ボンと膨らみきっている。量感といい丸みといい、八百屋の上座で祭られている高級メロンとも張り合えるクラスだった。

彼女の上半身の魅力は胸だけではない。背筋をピンと伸ばしていることで引っ張られている腹部も、そうそうお目にかかれるものではない。無駄な肉はついていず、扇形の軌跡を描く肋骨が悩ましい。その下に広がる腹筋はうっすらと割れている。なだらかな肉丘の中央には縦長の細いおへそがポツンと窪んでいた。

牝性の具現である美巨乳と、鍛えられた肉体美が同居する女体は、男勝りで男口調という特徴と相乗効果を起こして思春期男子の鼻の下を伸ばさせていた。

「こんなアタシでも女のはしくれ……女がこんなことをする意味は分かる年頃だよな？」

浮かんだ微笑は、汗だくでスポーツを楽しむ快活な女性のものでも、進んで学生の世話を焼く親切な女教師のものでもなかった。童貞男子が日常生活ではおよそ見ることのない、セックスの匂いを漂わせるオンナの淫笑だった。

「ふ、ふざけるな！」
木杉沢だった。男子ソフト部のエースにして、中肉中背の爽やか系ハンサムが吼える。奥歯を噛み締めて、オンナの顔で迫ってきた二十四歳の女体育教師を睨みつける。
「山上のことは大嫌いだけど、それとこれとは話が別だ。オレは色仕掛けなんかでスポーツマン精神を売り渡さない！　田中もそうだろ⁉」
美巨乳に鼻の下を伸ばしていた相棒がハッとした。ソフト部で木杉沢の球を受ける田中は、彼とは反対に無骨な巨漢だった。汗だくの姿が魅力的なスポーツマンなのだが、それを理解する思春期女子はいず、モテない学園生活を送っている。
「お、おうよ……学生だからって馬鹿にしてもらっちゃ困るぜ……」
合いの手を送るものの、依然として胸をはだけさせている美羽子をチラチラ見ている。未練たらたらであるのは一目瞭然だった。
「そうか……でもアタシの気持ちを試してみるくらいはしてくれるか？　それで受けてくれない時はキッパリと諦めるから」
号令が似合う硬くて低い声がますます粘り気を孕んでいる。肩をくすぐる短い黒髪が揺れた。ヌメル赤舌で血色のいい上唇を舐めながら、真紅のマイクロビキニブラで支える九十四センチEカップの肉弾巨乳を、下から掬い上げてそっと揺する。
下半身は野暮ったい濃紺ジャージで包み込んでいるのに、上半身ではジャージをはだけ

させて自身のオンナの膨らみを強調する。さらさらの前髪の奥で光る切れ長の目が挑発的な色を宿し、舐めたばかりの唇がテラテラとしたツヤを放つ。雑誌などでもほとんどお目にかかれないイイオンナがそこにいた。

「た、試すくらいはなぁ……」

田中がおずおずと、いかにも仕方ないという風に口を開いた。

「おい田中！」

信じられないという顔で女房役へ振り返る木杉沢。田中は気まずそうにとつとつと、だが明確に言った。

「試すくらいいいだろ……？　美羽子先生が何をしたって、俺らの心を変えることなんてできないさ。先生にしても、試して嫌だと言われたら諦めるって言ってるんだから……」

木杉沢は口をへの字に曲げて憮然としている。彼が何か言う前に美羽子が先手を打つ。

「決まったようだな。さっそく、アタシの誠意を味わってもらおうか。まずは田中からだ」

身体のラインを見せつけるキャットウォークで距離を縮める。この体育用具室は軽金属の密室で、しかも六畳ほどの広さしかない。美羽子が履くのはスニーカーであるにもかかわらず、ガツンガツンと床が鳴り響く。

田中と鼻先を突き合わせる。美羽子の身長は百七十五センチ。対する田中は百八十二センチ。間近に迫った顔と顔は、片や余裕たっぷりのオンナ、片や美人体育教師の枕営業に

胸をときめかせる童貞男子。いかつい顔がデレッと伸びている。
美和子がさらさらの黒髪をなびかせた。学長から賞状を受け取る恭しさで跪き、男子の腰骨の上に乗る短パンの裾に手を伸ばす。指を鉤状に曲げてトランクスのゴムまでもを巻き込み、そろそろと下げる。
こんなことを期待していたはずの田中も、いざ下着ごと短パンを下げられると恥ずかしそうに唇を噛み締めた。一方の美羽子は、唇の両端を僅かに上げている。頬がほんのり赤くなっているのは蒸し暑さのせいだけではないだろう。学生を誘惑するために性的奉仕を行う非常識さに、美羽子の胸がドキドキ鳴っている。
現れた男性器は半勃ちだった。魚肉ソーセージみたいにだらっと垂れてこちらを見ている。美羽子は奥に広がる縮れた叢に鼻先を近づけた。
「すんすん……はぁ、すごく汗臭いな……暑い中あれだけ活躍していたんだから、トランクスの中のモノがこんな風になっていても当たり前か……あぁ、アタシ達を苦しめた男のアソコの匂い……」
空腹の大食漢よりも下品に、アロマテラピーに陶然とする女性よりもうっとりと鼻穴を収縮させる。鼻腔で感じるむせ返る匂いだけでなく、喉奥に入って気道を通過していくむわっとした濃い空気も心臓の律動を早めさせる。
茂みに押し付けられた鼻が移動する。性器の根本の周りも念入りに嗅ぎまわると、反り

返り始めた竿部に手を添えた。掌で肉竿を支えながら、根本から亀頭までの区間を鼻先で何度も往復させる。もちろん匂いを嗅ぎながら。形よく尖った鼻先の硬さと、鼻腔を行き来するそよ風が裏筋と竿をくすぐり、男性器をますます勃起させていく。

「あの美羽子先生がこんないやらしいことを……！」

田中の手がわななき、黒髪ショートの頭をガシッと掴む。美羽子は嫌がるそぶりをまるで見せない。九十四センチEカップの上乳が嬉しそうに揺れているだけ。

「これで勃起は一区切りかな……なかなか逞しいじゃないか。一人前に皮もあまり被ってなくて……でも、まだまだ初々しさがあって可愛くもあるな」

男子田中の勃起ペニスは、長さは十一センチほど、太さは三センチ前後だろうか。成人の平均的なサイズといえる。亀頭は紫色を帯びているがまだまだ赤みが強くて可愛げがある。肉傘というには役者不足だが、膣内を引っ掻くための出っ張りも美羽子の腹筋ほどには段差がある。竿の色は肌色で、走る青い血管もそれほどグロテスクとは感じない。

未成年学生のモノということを納得させるペニスは、教え子に性奉仕をしている実感を強めさせた。イケナイことに耽っているという背徳感の強まりは、愛撫さえ受けていない美羽子の身体を火照らせる。重くなってきた乳首が、自身の興奮を一層自覚させた。

「ふふ、たっぷり可愛がってやるぞ……この男らしいペニスを……」

嬲るような、慈しむような凛声で明言する。リップサービスを絡めたことは効果覿面で、

勃起ペニスは喜ぶように跳ねている。犬の『お座り』の姿勢になり、興奮で赤みが濃くなった唇を上下に離す。整然と並んだ真っ白な歯を見せながら、口だけを前に突き出す。頬の縮みに合わせて凛とした目元が垂れ下がる。唇の間に広がる温かな粘膜空間に、元気のよい若牡がゆっくりと引きずり込まれていく。

「あああぁぁぁ……！」

田中が濡れた歓声をあげた。頭に添えていた掌が嬉しそうに強張って、女体育教師の顔を自分の股間に引き寄せる。彼女は抵抗せず、好きなようにさせている。ただ、流石に全く平気でもないのか、切れ長の目が苦しそうに細まった。田中が口で、美羽子は鼻で息を荒らげる。二人はしばし、彫像のように動きを止める。

「んふっ……えろぉ……あふっ、はふぅ……若い男子学生の……あんなに手こずらせてくれた男のチンポぉ……」

深く呑み込むことに慣れてくると、美羽子は行動を始めた。限界まで舌を伸ばして、竿の下に滑り込ませる。唇とペニスの間に開いた僅かなあわいを利用してはふはふと呼吸をしながら、ワイパーのように舌を右へ左へと動かして、裏筋ごと竿の下側全体をしゃぶる。

プリプリの肉棒が舌に伸し掛かる圧力が心地いい。ゼロ距離から放たれる牡棒の臭気と熱気の威力はどうだろう。どうしようもなく牡の存在感を感じてしまう。

「うぅっ……気持ちいい……美羽子先生……っ」

頭を掴んでいた掌から力が抜けた。美羽子はすかさず唇を窄めて肉竿の円周にくらいつく。頬をへこませたまま、そのまま亀ののろさで亀頭の頂上まで頭を引く。

「おっ、おおおっ、す、すげぇ、なんだこれ！」

鈴口を通過して唇が離れると、ちゅぽんと水音が響いた。美羽子はまた唇を寄せ、その隙間に亀頭の先を突き刺させる。唾液でぬるぬるの唇に力を込めて、ぎゅ～っと根本まで扱きあげる。

唇だけを使った往復運動は次第に速度を増していく。エンジンのピストン運動並になるのはすぐだった。んもんもと呼吸し、ちゅぽちゅぽと淫らな水音を奏でながら、教え子の肉棒を興奮させる。

美羽子の凛とした目尻はトロンと垂れ、瞳は真ん中によっている。顔は赤く染まっていき、立ち上る蒸気が汗臭さと体臭とをさらっていく。狭い体育用具室に場違いな性臭が充満し、牡牝の熱気が広がっている。

（あぁ、学生が……アタシの提案を蹴ろうとした立派な子がアタシのフェラに酔っている……爽快だ……）

自分を怒鳴りつけた男子の肉棒が、舌の上で気持ちよさそうに暴れている。我慢の限界を超えた鈴口が、隠すことなく堂々と、快感の証汁を垂らし始めた。

「あふっ……じゅるるる、お前のチンポからカウパーが出てきたな田中……ちゅ～ぅ、

あぁ、にがしょっぱい……うまい……ぃ」

唇で亀頭のみを包み込み、好戦的な上目遣いで男子の目を見つめる。口の中では、尖らせた舌先で鈴口をねちっこくほじくり、ちゅうちゅう吸い上げ、先走り汁を舌の上に流している。とろとろの牡汁を舌帯全体に張らせ、味をじっくり味わい、最後に喉を蠢かせる。

「飲んでる……美羽子先生が俺のカウパーを飲んでくれてる……信じられねぇ、あの美羽子先生がこんなスケベなことをしてくれてるのかよ！」

「なぁ田中……ちゅるっ、このままアタシの口でイきたいだろ？　アタシもお前のザーメンを搾り出したくてたまらないんだ……ちゅぱちゅぱ……だからアタシのお願いを聞いてくれないかな……そしたら、精飲だって、好きな所にぶっかけたってしたい放題だぞ……ずずずっ……」

とめどなく溢れてくるカウパー汁をすすりつつ、亀頭全体を舐め回す。射精欲求を煽ってやりながら、肉欲につけこんで堕落の提案を飲ませようとする女体育教師。

「っう……それは……はぁあ……でも……」

眉間に皺を寄せる田中。信念を貫こうとした男も、今や美人体育教師のふしだらな誘惑と高潔な精神を天秤の両端に置いてしまっている。

「田中、惑わされるな！　スポーツマンがスポーツマンシップを捨ててどうする？　拠り所にしているものを汚していいのか⁉」

美羽子の手管に圧倒され、すっかり傍観者になっていた木杉沢が励ましの檄を飛ばした。
「そうだよな……それは分かってるんだが……ちくしょう……」
相棒の正しい激励も、美羽子の性奉仕の魅力を完全に打ち砕くことはできなかった。陥落しかけと見取った美羽子が、甘ったるさたっぷりで囁きかける。
「ちゅっ、ちゅっ、初めにも言ったが、固く考えるな……体育の授業で女子のチームが危なくなったら手を抜いてくれれば十分なんだ……それを承諾してくれるだけで」
間を置く。二人の視線が集まったのを確認し、
「アタシのぬるぬるの口とぬめぬめの舌でイかせてもらえるんだぞ？　はぁ……アタシのいやらしい口の中に、お前のイキのいいザーメンを思い切りぶちまけることも……」
『お座り』の姿勢で行儀よく並んでいた腕を内側に寄せる。上腕で寄せて上げられた九十四センチEカップの肉果実がごわっと盛り上がった。小麦色のきめこまかい肌の山が、深い谷間を形成する。肌は噴き出した汗で匂い立ち、健康的な巨乳に卑猥さを加えていた。
「この、お前らが褒めてくれたおっぱいにかけることだって思いのままだ……はふぅ……女教師にザーメンを飲ませたり、こんなおっぱいにぶっかけるチャンスなんて、もうないかも知れないんだぞ？　あむ……こんなにレアで気持ちいい体験は、もうできないかも知れないだろ？」
言い終えると唇を離す。上目遣いで男子の様子を、鼻先の気配で勃起の様子を観察する。

先走りをたらたら垂らす亀頭の先に何度もキスし、あるいは射精準備万端の陰嚢を、触れるか触れないかのタッチでくすぐってやる。射精させず、欲望だけを膨れ上がらせる。

おあずけは嫌とばかりに田中の腰がクイクイ動いた。だが、持ち前の動体視力を駆使してかわし、美羽子は決して必要以上に刺激してやらない。

やがて田中が力の抜けた声音で誰にともなく、

「だよなぁ……俺モテないから……一生童貞かも知れないのに、こんな嘘みたいなチャンスを逃したら勿体ないよなぁ……せっかく、こんなエロい身体のエロい美人先生がＡＶみたいなことさせてくれるっていうのに……」

「田中！」

「わりぃ……もう我慢できねぇんだ……許してくれ、相棒……」

木杉沢の全身が、信頼していたパートナーを裏切り者となじっている。汗が似合う暑苦しい田中の目は、ひたすら弱弱しかった。

「ちゅむっ、なら誓うんだ田中。アタシと木杉沢の前で……れろれろ」

弱めていた奉仕に熱を入れる。唾液でたっぷりぬめらせた口腔で、堕落の牡棒を根本まで呑み込む。唇で思い切り食い締めて、頭を前後に振ってピストン。肉棒が唇で擦りあげられる度に、じゅっぽじゅっぽと水音が響く。待望の快感を得て、射精したがっている勃起は喜び、狭い口内を跳ね回る。

「お、俺は……美羽子先生に味方します……くぅっ、でる……じょ、女子がヤばそうになったら手を抜いて、あぁっ……た、あぅっ、助けますッ！」

美羽子はしてやったりと唇の端を吊り上げた。苦虫を噛み潰した顔の木杉沢に勝ち誇った流し目を送ってやる。

「ちゅぽん……ふふ、よく約束してくれたな……思い切りイくといい……射精は……チンポ汁はどこに吐き出したい？　飲ませたいか？　アタシの顔にかけたいか？」

「胸に……美羽子先生のデカパイにぶっかけたい！　……その真っ赤なスケベブラにも俺のザーメンを……俺の汁を思い切りひっかけたい！」

「はぁ、分かった……なら全部アタシに任せるんだ……お前はただ気持ちよくなってればいいからな……んっ」

陥落の男子がコクコク頷く。んっ、んっ、と甘いあえぎを漏らしつつ唇ピストンを更に激しくする美羽子。頬をへこませ、熱っぽい目でさらさらの黒髪を揺らす。

段差をチロチロ舐められていた亀頭がぐわっと膨らんできた。絶頂が近いのだ。美羽子は舌に伝わってくる触感と熱さに意識を集中させ、亀頭の限界に注意を払う。精液を吐き出そうとする肉部は更にぐわっ、ぐわっと膨張している。膨張の間隔が短くなり、男根の切迫が限界に思えた刹那。

「おぅっ！　ぅ……うおおおお!!」

「ぅッ！　なんだ、これ……気持ち悪――ひぁぁっ！」

クロッチをずらす按配で、お尻の谷間に走っていた水着の布が脇にずらされたと思った矢先に、生温かい空気が縦皺の窄まりに当たりだした。かと思えば、今度はヌメル何かが穴の中に進入してくる。

「親父殿が、三島先生のお尻の穴に舌を入れているんですよ」

息子が楽しそうに説明した。アヌス舐めは夫もよくしてくれる。入り口も肉道も、平等に愛してくれていた。愛夫の心のこもった舌愛撫は、アブノーマルなプレイでも心底幸せな気分にさせてくれる。

けれども、今の相手は女の弱みにつけこむ卑劣漢だった。しかも、情欲のこもった視線で教え子を視姦するような節操なしでもある。

所作にはためらいがなかった。太腿の付け根をがっしり掴み、足場を確保した上で顔を近づけている。入り口の皺を伸ばしながら、めりめりと奥の奥まで入ってくる。舌の表面に展開している、イボイボバイブじみたザラつきが唾を潤滑油にして肉の壁を撫でていた。

「あふぅっ、はぁぁ、長いっ、そんな奥まで入ってくるなんて……ぅあぁ……」

他の男の舌の形に広げられる肉道。胸を潰されるような圧迫感が、次第に妖しい甘みを帯びてきた。なまじ悦べるせいで、心に反して身体が順応してしまっているようだ。

すべり台になっていた背中がぐっ、ぐっと徐々に勾配をキックしている。腰から尻たぶ、

えっシーン試し読み スタート

太腿に至るまでの女体ならではの曲線がピクピクわなないている。
ほどなくして進入がとまったが、それで終わりではなかった。舌がそよぎだした。日本晴れの中で元気よく泳ぐ鯉のぼりを髣髴とさせる勢いだった。
「あひぃッ！　いやあっ、そんな、暴れて、ぅあ、んふぅぅぅっ」
反射的に上半身が浮いたが、抑えつけている息子の力が増して押しとどめられた。下半身にしろ、筋骨逞しい初老の膂力が効いている。男の筋肉でがんじがらめにされている実感が、この父子の籠の中に捕らえられている実感を強くさせた。
と同時に、被虐の悦びも覚えてしまう。時間と共に、肉道をねぶられる甘さが裏側の花芯に波及していくのが分かった。
（くぅっ、相手は最低の奴らなのに……でも、あの人とたくさんセックスして……独りで楽しんでいた時とは比べ物にならないくらいに開発されたから……いっぱい悦べるカラダになってしまってるから、反応してしまう……のか……くぅっ……こんな連中にも、感じてしまうなんてっ）
「くふふふ、三島先生はアナルセックスもいけるクチなんですねぇ。身体のサイズを測らせてもらった時、指を入れて具合を見させてもらいましたが全く気づきませんでしたけれども……いやはや、まさか男勝りで女子の憧れの的、男子にもファンが多い三島美羽子先生が、お尻好きだったとは」

知った上で、尻マニアの父親に責めさせていると自白すると共に言葉責めしてきた。
「うるさいっ、アタシは別にそんな趣味はない！」
嘘をつく。まさか他人に、しかもこの父子になどはいそうですと言えるわけはない。アナルセックス趣味は、夫とだけの秘密なのだから。
「おやおや、教師なのに嘘をつくのですか？　くっくっくっ、先生のおま○こが涎を垂らしてマットに広い染みを作ってらっしゃるんですよ？　そこは全く触れられていないのにですよ？　知識ゼロの初心ならまだしも、性欲旺盛で耳年増な年頃の男子には通じはしませんよねぇ」
色白男子がクロッチに片手を伸ばした。太腿に寄せる。にちゃっ、と粘っこい音がすると花弁に外気が纏わりついてきた。他の素肌に感じるのよりも温かったことに、秘所の火照りぶりと濡れぶりを思い知らされる。
「くぅっ……！」
斜めにアプローチしてきた指が二枚の花弁を下から上になぞる感覚。背筋が勝手に弓なりに反れて強張った。視界の端で、幸多の唇の端が愉快そうに歪んだのが見えた。
悔しくて、もう何をされても我慢してやると身を固くしたのも束の間。指の第一関節までが花弁の谷間の奥に入りこみ、逆回転のドリルじみた動きで、届く範囲の膣肉を満遍なくかき回された途端に、顎が跳ねあがってしまった。

一緒に、指で栓をされている肉穴から恥蜜が垂れてしまったらしい。ポタポタとマットの上に落下する音も聞こえた。

「ほらね。カラダは素直なのに、三島先生は強情ですねぇ」

「こいつは昔からそうだ。そうしてわしに盾ついてきて……ふひひひ、しかしだからこそアナルセックスでよがらせる甲斐があるというものだ。ほぅら、今からコイツをぶちこんでやるぞ。すっかり発情していたんだ、欲しくてたまらなかっただろう？」

ビキニパンツと太腿が擦れあう音がしたかと思うと、むき出しの尻たぶに灼熱感が押しつけられた。しなやかだが硬い感触が棒状に伝わってくる。

「なっ、いやだっ！　アンタのペニスなんて……そんな汚いもの……引っこめてくれっ」

「くくく、そう嫌がるな。受けいれがたいと思うのは初めだけだ。すぐによくなるぞ？」

勃起ペニスで尻たぶをペシペシ叩きながら、嫌みったらしい抑揚をつけて言い放つ。

「大好きな夫がいるのに……脅して身体を求めてくるような卑劣な奴にされるのに……気持ちよくなるわけないだろ！」

精いっぱい首を巡らせ、睨みつける。しかし、その頬は上気していて、怒りで吊りあがっているはずの目尻と眉尻は、緊張と弛緩の間を彷徨ってヒクヒクと上下している。迫力などは微塵もない。身体が快感に反応しているのに、惨めな虚勢を張る強情な女の顔でしかなかった。

「くはははは っ、まさかお前のそんな顔が見れるとはなぁ……溜飲が下がる思いだ……お礼に思い切りよがらせてやる……積年の恨みをこめて、わしのこの肉棒で、とびっきり……それこそ夫にされるよりも気持ちよくなるよう、突きまくってやるぞ！」

「あぅッ！」

縦皺に囲まれた穴が広げられ、外気が内臓内部になだれこんでくる。だが、すぐに塞がれた。プリプリした弾力のある感触が、入り口の薄皮にべったりとくっついた。

美羽子はうろたえた。普段の泰然とした態度が崩落し、恐怖に震える幼女のようにみっともなく手足をバタつかせようとする。しかし、両手は息子に、腰から下は父親にガッシリと押さえられていた。さしもの男勝りも、力の入れにくい体勢、大の男二人がかりという状況では何もできない。

ずぷぅぅぅ……ずぷぷぷぷ……。

塗りこまれた唾液と、もともとある内臓のヌメリを潤滑油にして卑劣漢のペニスが進行してくる。ゆっくりとした歩みが、登山者に一歩一歩征服されていく山の気持ちを味わわせた。ペニスの形に拡張されていく感触が、穢されているという実感を強めた。

「ふぅ……キツキツでたまらんが、ムリを強いているという感じがない……本当にこなれてるわい。これは、それだけたっぷり遊んでいたという証なのだろうなぁ。どうだ、わしのモノは。尻の具合で分かるだろう？　旦那よりもいいだろうが」

『聞くまでもないがな』という言葉が続きそうなほど、自信に溢れた問いかけだった。
（アタシのお尻が……こいつのペニスの形に広がってる……伝わってくる形は、あの人のとは微妙に違うけれど……でも……）
締めくくりの言葉を、首を振って打ち消した。
「まだ強情を張るのか？　ほらこいつだ、こいつに尻穴を満たされている感触は、旦那のをぶちこまれているよりも気持ちいいだろう？」
自分に向けた否定だと勘違いした山上は、じきに根本まで入るという地点で、腰を前後させた。
その動きはとても緩慢で、ビデオのスローモーションじみていたが、みっちりと密着している肉道がゴリッ、ゴリッとこそがれた。カリ首に擦られている部分が特に甚だしく、まるで燃え上がっているかのように熱くなり、痺れてくる。
（す、すごい……ッ……お、お尻が感じてしまっうぅ……）
ついさっき打ち消したばかりの言葉が胸中で迸る。本音を言えば、他の男のよりも優れているに決まっていると自信満々に言うだけのことは、確かにあった。
見ていないので確かとは言えないが、肉道を押し広げて居座っているものの熱さ、しなやかさ、長さ、太さ、存在感は、成人男性の平均値を上回る夫のものに勝るとも劣らない。
昂っていた身体は、優秀な牡棒を受けたのをきっかけに極彩色のもやの中に包まれてい

た。意思に反して進入してきた異物の圧迫は充実感として受容され、下準備を受けて膣内に蓄積していた熱が疼きへと変わっている。心は、夫でもない男に犯されていると自覚しているのだが、男日照りを強いられてきた身体は悦んでしまっている。

「あふぅ……くはぁああ……あぅっ……」

尻たぶの膨らみはじめに手のひらをスライドさせ、握り締める男体育教師。腰が動きだす。柔らかい尻たぶとペニスのふもとがぶつかりあう甲高い音が木霊する。控えめな粘着質な水音に混じり、美羽子の熱っぽい呼吸音が混じっている。

（こんな……ダメなのに……こんなヤツに、無理矢理されてるのに……）

相手は夫でない、脅迫して身体を求める汚い奴なんだ。そう思って、自身を叱咤して醜態を見せまいとするのだが。

ゴリュッ、ジュブンッ、ゴニュッ、ジュズズズッ！

「くぅっ……あぁあ……あふぅ……んんっ、あぁッ、あぅっ！」

人並みはずれたペニスが、逞しく出っ張るカリ首で肉道を広げながら擦りあげていく感触も、内臓を引きずりながら出ていく感触も、えもいわれぬ快感だった。

歯を食いしばっても、一秒も保たずに顎から力が抜けてしまい、みっともなくガチガチなってしまう。腹の底からこみあげてくる吐息は酷く熱っぽく、吐き出す際には色っぽいあえぎ声が漏れてしまう。

（悔しいけど……あぁっ、否定しきれない……アタシのカラダぁ……あぁ……気持ちよくなってしまってぇ……！）

肉の衝突音は次第に高くなっていき、生じる感覚が短くなっていく。連続して繰り返される抜きさしには、濃密な情念が感じられた。

「ふんっ！　ふんっ！　ふんっ！　はっ、どうだ奥さん？　旦那でない他の男……しかもずっと馬鹿にしてきた体育教師に尻を掘られる気分はッ⁉　そんな男に尻を抉られて、はしたない蜜をだらだら零して、尻をヒクヒク痙攣させる感想はァ⁉」

尻好き嗜好の充足に、宣言通りに積年の恨みを上乗せしているらしい。富実男の状況説明は美羽子を一層惨めにさせた。

そして憎たらしい。富実男は恨みをぶつけるといっても、美羽子の尻穴内部を破壊しようとはしていない。一見して衝動のままに振る舞っているようで、実際は至極冷静だった。ペニスで肉道の様子を、目で美羽子の態度を観察し、探りだした弱いところを突いてくる。腰を調整して亀頭のプリプリで突き、段差のキツイ亀頭冠で擦りたてる。

「あはぁ、こんな、相手はこんなヤツなのにっ、アタシ、アタシはぁ、んぁ～～～」

脇腹も腹筋もピクピクとせわしない。腰から太腿にかけての痙攣が特に酷い。男の嗜虐心を燃え上がらせて更なる腰突きをねだるかのように、粘っこい震えを披露している。

「もうたまらない、限界だという顔だな奥さん。いいぞ、イクんだ。わしのモノでイかせ

てやる。旦那とはご無沙汰だったのだろう？　人妻冥利をたんまりくらうといい」

挿入されて間もないというのに、もう達してしまおうとしている自分の身体の貪欲さが恨めしかった。脅迫者の『人妻』、『奥さん』という言葉が、夫以外の男とセックスをしている事実をつきつけているのに、それでも感じてしまう情けなさが痛かった。

だが、そんな嫌悪感も絶頂間際の快感に呑みこまれていき、後に残るのは絶頂したいという欲求のみ。

「あふぅッ、あぁっ、いやっ、ダメっ、イクっ、あああ、イクぅッ！」

甘くも鋭いあえぎ声に混じって、夫にだけ聞かせている絶頂申告までもが飛びだしている。悦楽で蕩けさせられた身体は心にまで影響を及ぼし、普段ならば決して言わない言葉さえも吐き出させていた。

「そらイケっ、奥さん、イクんだっ……わしもイクぞ……一緒に果てるぞ奥さん……はあぁ、でる……そぅら、くらえ、わしのザーメンを尻の中で浴びてイケっ!!」

僅かな隙間から漏れでている先走り汁でテカる尻穴を親指で広げ、勃起の根本と尻たぶの頂点を限界まで密着させる。

最高潮に長く太くなった人並みはずれたペニスが、奥の奥まで征服した瞬間、ネバネバのザーメンが迸った。

目の上のコブであった女であり、他の男と幸せに暮らしている人妻の肉穴に下劣漢がぶ

ちまけた精液には積年の情念がたっぷり含まれていた。肉道の隅々にベッタリへばりつくと共に、その灼熱の液温をもって中出しされた記憶を美羽子の脳に刻みつける。

「んあああああああ――――――っ！　せ、精液でてる、アタシの中でビュクビュクッてはじけてる、イクッ、イク、いっ～～～くゥゥゥゥ!!!」

強張りながら痙攣する小麦色の女体。快感の中にいることを自白した恥蜜がどぷっと溢れてマットへ滴り、ヒップから頭にかけてが急勾配を描く。豊満な乳房がマットに押しつけられ、連動して顎が跳ねあがった拍子に喉がさらされた。首の後ろで結わえていた馬の尾スタイルの黒髪が宙で舞う。雫となって体表に浮かんでいた汗の玉が、雨を防いできた傘を開閉させた時と同じく弾け飛んだ。

いつもであれば凛と緊張している目が見開いて、まなじりがヒクついていた。並びのいい真っ白な歯を零れさせながら、興奮のあまり赤く染まった唇の間から、劣らぬ赤に彩られた舌が飛びだしてわなないている。赤舌は唾液をたっぷりまとっていて、汗みずくの裸身といい勝負のきらめきぶりだった。

（はぅアアアァ……アタシ、イった……イってしまった……イク、なんて言いながら……相手は最低のヤツなのに……なのに、なのにアタシは……夫に可愛がってもらってる時みたいに反応して……）

絶頂の充足の後に訪れる、猛烈な罪悪感と屈辱感。そして、遠くなる意識。これ以上の

醜態は見せるものかと心を強くもっても、甲斐がなかった。美羽子の矜持へのとどめじみた絶頂失神に、彼女は抗えなかった。

悔しいくらいに心地いい眠りに落ちるまでの間、父子の勝ち誇った、それでいて下卑たせせら笑いを美羽子は聞いた気がした。

（……一体アタシは……どこまで恥をかかされるっていうんだ……）

強烈な日差しを受けて熱されていた体育用具室は、ちょっとしたサウナになっていた。ただいるだけでも汗が滲みでてくるというのに、羞恥心からくる身体の発熱が輪をかけている。窓一つないプレハブであるので、逃げずに滞留している湿気も不快だった。

「では、先生。負けたバツゲームを受けてくださいね」

糸目色白の男子、山上幸多が眼前まで顔を近づけて言った。口元はニタリと歪んでいて、映画か何かの拷問役の陰湿さを醸しだしている。相手を傷つけるのが愉快で仕方がないという風だった。

美羽子は渋面を深くした。眉間に不機嫌そうな皺ができ、牡丹色の形のいい唇がむっつりとへの字を描く。

しかし、それは他の参加者たちの喉を鳴らす結果を呼んでいた。用具室にいるのは美羽子と幸多の二人だけではなかった。

運動部所属の三十人。部活で鍛えた逞しい肉体を、学園指定のTシャツと緑色の短パンだけで包んだ男子たち。そんな彼らも同伴していた。みな例外なく、思春期真っ盛りで蒼い性欲を滾らせている。

今も、普段からは信じられない、まさに夢のような姿をしている女体育教師に鼻の下を伸ばしていた。欲望に正直すぎる何人かは、股間を膨らませている。

――美羽子先生エロいなぁ……。

――やっぱりすげぇ巨乳だ……少し垂れてる所が人妻っぽくていいな。

――引き締まってるカラダなのに、ムネとか女らしすぎるのがたまんねぇ。

彼らは何も言っていない。しきりに生唾を飲みこむだけ。しかし、欲情に燃えた瞳を見ていると、そう思われている気がして仕方なかった。

（当たり前だ……こんな格好をしてるんだもの……）

胸中で嘆息して、首から下を見おろす。美羽子は学生時代に戻っていた。女子たちが着ているのと同じタイプの体操着を着て、濃紺ブルマを穿いている。三十二歳の体育会系熟れ妻教師がその姿になるというだけでも恥ずかしく、イメクラ嬢にでもなった気分にさせられるというのに、着させられた衣装は普通の物とは違っていた。

弱みを握って逆らえないのをいいことに、山上幸多が用意した物は、シースルータイプの体操服だった。いわゆるスケスケもの。デザインはなんの変哲もないものの、着ると濡

れたアマガッパを着ているのと同じく、小麦色の素肌が透けて見えてしまう。
それだけでも羞恥の極みだというのに、下着も用意された物を着けさせられていた。ニプレスだった。献血で使われる丸い絆創膏じみた物が乳首に貼りついている。色も肌色ではなくマゼンダと、まるで装着者が、乳輪と乳首はここですよと声高に主張しているかのようだった。
更には、前回の水着と同じくサイズが一回りか二回りは小さく、身体にピチピチだった。ただし伸縮性はあるようで、腋から脇腹のラインから零れでる丸い美巨乳が、そのなめらかな輪郭と量感とを存分に主張させられている。無駄な肉のないしなやかな脇腹と腹部の線がくっきりと浮かびあがり、乳房のたわわさと肉体の美しさを互いに強調しあっていた。
――パンティーラインが山みたいに高く浮かんでる……。
――フルバックか。上は派手に決めてるのに、パンツは地味というギャップがいい。
――フトモモのあのむっちりさ……女子どもには絶対に真似できねぇ、熟女の味だぜ。
ブルマは、デザインこそ普通のローレグものだったが、やはりサイズは小さかった。男子の学園指定水着であるビキニパンツを穿いているかのように、胴底に貼りついて、下腹部の曲線を明確にしている。
命令されたショーツは白のフルバックだった。学生が着ける物としてはモハン的なものであるが、立っているだけで縁の線が浮かんでしまうのではふしだらといわざるを得ない。

高い位置にあるお尻から出されている太腿は、ブルマにある出入り口の窄まりから、その肉付きの豊かさが際立っている。

上腿の半分から下は黒のニーソックスだった。足の形を整えて、スラリと長い足の脚線美を大盤振る舞いさせている。靴は普段から愛用しているスニーカーだったが、そのことが普段の禁欲的な姿を想起させ、今の破廉恥な姿のスイカの塩となっている。

（あぁぁ……見てる……みんな見てるぅ……）

体育用具室のマットの上に立ち、頭の後ろで手を組んでいる美羽子を、男子たちがぐるりと囲んでいる。前からも横からも後ろからも感じる視線は、まるで舌で舐められているかのようなほのかな刺激を全身に感じさせる。時間が経つにつれ、心が全方位からしゃぶられているかのような気持ちにもなってくる。頭の奥が白熱電球にでも熱せられている風で、どうにかなりそうだった。

思い出す。

先ほど終わった体育の授業もこの格好でやらされた。富実男から男女別のソフトボールの対抗戦をもちかけられ、返り討ちにしてやると鼻息荒く女子たちが承諾し、試合開始直前にジャージを脱いで披露したこの姿が士気をガタガタにした。

妹同然に大事にし、また姉のように慕ってくれている彼女たちの侮蔑の眼差しは、酷く痛かった。一方で、自身のはしたない姿を見てやる気満々になっていた男子たちの様子は、

輪をかけて惨めな思いにさせてくれた。
そんな中で、普段の力が出せるわけはなかった。結果、女子チームは惨敗し、美羽子はここに連行された。
「では、そろそろ始めましょうか。三島先生へのペナルティーは、一時間その格好で立っていてもらうだけにします。何があってもそのままです。簡単でしょう？」
美羽子の背後に立って言う幸多。彼女にというよりは周囲の男子たちに向けていった風だった。そして、声の中には取り決めの最終確認じみたニュアンスも感じられた。
（アタシが逆らえば弱みをバラす……そういうことなんだろうが、こんなに大勢の男子に恥ずかしい思いをさせられるのなら、バラされようがされまいが同じことじゃないか！）
その独白が通じたのか、幸多が続けた。
「そうそう、これから一時間のことは、用具室から出た瞬間にみんなの記憶からなくなります。いいですね、みなさん。そういうことでお願いしますよ？　白昼夢とでも思ってください。でないと私、困ってしまいます。親父殿に泣きついてしまうかもしれません」
婉曲的な恫喝だった。良識的な美羽子ならともかく、気性の荒い男体育教師は敵に回していいことはない。一同がそんな顔になる。
「では、三島先生、頑張ってくださいね。ルールは分かりましたね？」
「……あぁ、わかった……アタシは何があっても立っていればいいんだな……」

情けないほど掠れた声だった。

「はい。例えばこぉんなことを誰にされても、我慢していてくださいね」

幸多は二つの手のひらをお腹に当て、まさぐってきた。二匹の白い蜘蛛が這い回るような愛撫は、熱を帯びていた身体に甘い感触を染みこませてくる。思わず膝が前後に揺れ、大きさを強調させられているお尻が躍ってしまった。

「ぁあ……はぁぁ〜〜……分かって……る……」

これ以上の醜態は見せまいと奥歯を強く噛み、重くなってきたまぶたが落ちないように目の奥に力をこめる。だが、不随意筋までは叱咤することはできず、ムネや脇腹、太腿の痙攣は止まらない。望まない刺激によって支配されている部位は断続的にビクビクッと震えるままだった。

感じているくせに、それを表に出すまいと必死に我慢しようとしている被虐的な女性の姿を目の当たりにし、学生若牡たちの間で小規模のどよめきが起こった。鑑賞対象が男勝りの女体育教師であるだけに、劣情への刺激っぷりも並ではなかった。大胆な数人が美羽子へと足を踏み出した。

——な、なぁ山上よぉ……これから一時間のことは美羽子先生も忘れてくれるのか？

「えぇ。そうですよね、三島先生」

「……はぁぅ……あ、あぁ……そういうことになるな……くッ……！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/